



9月の歳時 防災の日・十五夜

暑さも次第にやわらいで、秋分の日を境に夜長に向かい秋が深まる頃。歌や月見団子でおなじみの「お月見」やお墓参りに行く人も多い「お彼岸」など、9月には昔から大切にされてきたなじみ深い行事がたくさんあります。

とうめい news

2026.9.1
Vol. 301

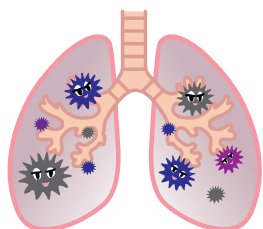
〒243-0034 厚木市船子237
TEL. 046-229-3377
発行者: 河野 昌史
編集責任者: 林田 朋子
印刷: (有)タイム21

ホームページアドレス <http://www.tomei.or.jp/clinic/>

まだまだ身近な肺結核

呼吸器科: 佐藤 明

TOPICS



暑い日が続いています。新型コロナウイルスやインフルエンザの流行は以前ほど目立たない印象（原稿執筆時）ですが、これらは肺炎やかぜ

と症状が似ているため、医療者は今も注意して診療しています。

同じように、似た症状を示す病気として見逃してはいけないのが肺結核です。結核菌という細菌に感染して起こる病気で、咳や発熱が長引く、体重が減る、寝汗が続くといった症状がある場合には、一度ご相談ください。

厚生労働省の2024年の統計では、日本では毎年約1万人が新たに肺結核を発症し、約1500人が亡くなっています。人口10万人あたりの罹患率は8.1人で、数字だけでは実感しにくいかもしれませんが、決して過去の病気ではありません。空気感染で広がるため、気づかいうちに周囲へうつしてしまうこともあり、注意が必要です。

今から100年ほど前、肺結核には決定的な治療法がなく、世界中で広く蔓延していました。当時は療養所での隔離や安静が治療の中心で、日本でも終戦直後の1947年には約5万床もの結核療養病床がありました。空気のよい場所で休めば治る、という発想に頼らざるを得ないほど、手立てが限られていたのです。

その後、人工(じんこう)気胸術(ききょうじゅつ)

や胸郭(きょうかく)成形術(せいけいじゅつ)といった外科的治療が行われました。これは、結核菌が作る空洞をしばませて病変の進行を抑える方法でしたが、菌を直接取り除けるわけではなく、病状が進んだ例では十分な効果が得られませんでした。呼吸機能への影響など、負担の大きい治療でもありました。

こうした状況を大きく変えたのが抗結核薬の登場です。1944年にストレプトマイシンが開発され、日本でも1950年ごろから使われるようになりました。さらにイソニアジドなどの薬が加わり、1970年代にはリファンピシンの導入によって治療期間の短縮も可能になりました。

現在では、肺結核は治療可能な病気です。ただし、世界では今もなお重要な感染症であり、日本でも毎年新たな患者が出ています。長引く咳や発熱、痰に血が混じるなどの症状がある場合は、呼吸器科にご相談ください。

※痰から結核菌が検出された場合は、指定医療機関での入院治療が必要です。

